



あすなる

有田市立保田小学校 校長室便り

令和 5 年 2 月 21 日 発行

第 15 号

(文責 校長 出口雄三朗)

～ 今回は「子育て」について少し… ～



早いもので、本年度もあと少しとなりました。子どもたちは、それぞれ1つ上の学年に進級します。昨年の今頃のお子さんの様子を思い浮かべて、今と比べてみてください。きっと驚くほどの成長が感じられることだと思います。

今回は「子育て」について、少し私の考えをお伝えします。私自身も2人の子を持つ父親です。今までいろいろなことを悩みながら、いつも「これで良いのか？」と自問自答しながら子育てをしてきました。子育てには正解がありません。だからこそ余計悩みます…。



皆さんは…、

- ・子どもの言動は親の責任、親としてきちんと教育をしなければいけない。
- ・子どもが失敗しないように、私が解決しなければいけない。

上のような思いに駆られることはありませんか。間違いというわけではありません。けれども子どものやることすべてが親の責任ではなく、すべての失敗が子どもをダメにするわけでもありません。

子育ての目標は「子の自立」です。子どもが自分で考え、判断し、行動できるようにしてあげることです。でも、私たちは子どもを思うあまり、「子どもが自分で解決しなければいけない問題」に、手や口を出してしまうことがあります。子どもが「やって欲しい」と言っていないのに、先回りしてやってあげたりしてしまうこともあります。

とはいえ、私たちがいつまでも「子どもにやってあげている親や教師」のままでいると、子どもが自分自身で考え、課題を解決する力が身につかなくなってしまうでしょう。それは、私たちの望むところではないことは、言うまでもありません。

「子育て四訓」というアメリカ先住民の言い伝えがあります。



乳児はしっかり肌を離すな
幼児は肌を離せ、手を離すな
少年は手を離せ、目を離すな
青年は目を離せ、心を離すな



小中学生は二つ目から三つ目、高校で四つ目でしょうか。小学校の3年生、4年生からは直接世話を焼くことを減らし、見守る姿勢が必要なようです。

そうはいつてもこの「見守る」というのがなかなか難しいです。「勉強しなさい」「早く起きなさい」などとは「もう言わない！」と決心しても、我慢した末にいつも以上にきつい口調になってしまうこともしばしばです。

また、「自分が子どもの頃に辛い経験をしてきたから、子どもには絶対に苦労させたくない」という気持ちから、過保護になってしまう場合もあります。



子育ては、自転車の乗り方を教えることに似ています。補助輪を外し、自転車の荷台からそっと手を離します。自分だけで走れた時の子どもたちの表情を覚えておいででしょうか。あの表情が、私たちの目指すべき「自立」した喜びを象徴しています。

子どもたちが自分で考えて進む方向を決めて、自分の力で進み、転んでもまた起き上がって走り出せるように、私たち大人は寄り添い、少しずつ手を離しながら、見守っていきたいものですね。